

令和6年度第2回北海道における障がい者の生涯学習の推進に向けた
調査及び研究に係るワーキングチーム会議 会議録

1 日時 令和6年(2024年)10月22日(火) 10:00~12:00

2 会場 北海道立道民活動推進センターかでの2・7

※オンライン(Zoom)併用のハイブリッド開催

3 出欠席

(1) 出席 【構成員】宮崎氏、松井氏、吉成氏(オンライン)

【事務局】本田主幹、森主査、増田主任

(2) 欠席 【オブザーバー】吉田課長補佐、芳村課長補佐、長岡課長補佐

4 議事

(1) 開会

(2) 説明

「ワーキングチームにおける調査・研究の確認」

北海道立生涯学習推進センター 主査 森 健太郎

- ・これまで視察においてヒアリングを実施した道内(滝川市)、兵庫県、大阪府、長野県、新潟県、東京都についての内容を確認。
- ・この後の協議に応じて、必要な視察を追加することも可能。
- ・(宮崎氏)生涯学習推進センターで実施している任意のアンケートについては、対象者の居住地をシールで色分けすると傾向をつかむことができる。

(3) 協議

視察における成果と課題について

- ・地域やコミュニティというものをどのように捉えていくかという議論が必要。
- ・集合して行うスポーツを介しての人とのつながりづくりはできているが、地区公民館に住民が戻ったときに、その地域での日常的な活動につながる事が重要。
- ・道外の地域も北海道が抱えている現状と大差はなく、地域住民が暮らす地域には何もなく、移動をして集うといったことが暮らし方となっている。
- ・地域づくりの実態、研究の分析の枠組みを、地域づくりを分析的に、つまり枠組みをもう少し整理しないと、普及啓発のためのリーフレットだとか、非常にあいまいな言葉になってしまう。
- ・今回視察に行ってみて、ローカルな、生の基盤の話をしていかないと、それをなしにテーマだけを話し合うことができないのではないかという気がしてきている。
- ・意識の変容を単に障害だけに特化して理解してはだめ、学校におかれた厳しい状況などが複雑に色々な要素が絡み合っていて、「障がい者を特別扱いしてしまっている」というところの分析が必要と思う。差別というと、「そんなことしていない」という平等意識はあるが、無意識のうちに特別扱いしてしまうという社会的な状況が

あって、そこを踏まえないと、表面的なレベルでの議論実践になっていく。

- ・障がい当事者にとっても、地域社会に見えない障壁を感じているところがある。
- ・教員は異動する、継続性は地域にある。社会教育主事も専門性はあるが、行政も異動があるため、事業の継承性となると、地域の団体に蓄積される傾向になる。専門性をより明確に、スキルや経験学習の蓄積といった問題になる。ここも、社会教育主事の専門性が重要。
- ・コーディネートの力、協働、行政と民間の協働は、社会教育主事の役割になる。
- ・住民の思いをどうやってつないでいくのかは、地域と行政をつなぐ、社会教育主事しかない
- ・障がい者の生涯学習をどうしていくかということを考えているが、視察先のようなうまくいっている事例は、これまでの地域づくりの結果という印象がある。どんな地域がつくられてきたのか、障がい者が暮らせない、特別扱いされる、そういう地域づくりがなされてきた結果と思った。
- ・「他者との関わりや存在感や尊厳をお互いに感じなくても生きていける」という今の社会一般の傾向は、ある種の勘違いであると思う。大多数のひとがそういう考えなのだとしたら、障がい者の生涯学習は自分事ではなく、特別なことになる、みんながカプセルに閉じこもる。そのカプセルの生き方自体を問い直す必要があって、それを社会教育が引き受けられるのか、そう簡単には変わらないが、その問題意識を持つことが大切。

(4) 閉会